

---

# 巴マミの救い方

佐藤太郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

巴マミの救い方

### 【Nコード】

N2987S

### 【作者名】

佐藤太郎

### 【あらすじ】

これは、ひとつの理不尽に抗ったひとりの少年の物語。  
もう二度と語られることの無いそれは、脆く儚い空想か…  
（注意、この小説は短編のつもりで書いたため一話の長さがおかしい事になってます、さらに矛盾点やら公式との相違まで訳が分からないこともでてくるかと思いますが、ご理解ください）

## 第一回世界（前書き）

こんにちわ、私です。知ってる方はお久しぶりです、知らない方は始めまして。

…こんな挨拶してみたかったです、すいません。

突然ですが、この小説じつは新作ではないんです。

今書いてるものの息抜きに書いてたんですが…こっちが纏まったので投稿してみました。

ですので、皆さんも適当に読んでください、どうぞ。

## 第一回世界

気がついた時には……全てが死んでいて、全てが終わっていた。

言われた通りに姉さんの帰りを信じて待っていただけなのに。

大丈夫って言うてたのに、死んだ。

夢だ夢だと思いながらも、俺の本能がコレは現実だと叫んでいる。

本当だとしたら、理不尽だ、こんな世界狂ってる。

どうでも良くなってきた、もはや絶望すら心地いい。

誰か、誰か助けてよ、いや殺して？壊して？

こんなおかしな世界、死んでしまえ。

「そう、全くおかしな事だね」

そう言ったのは白い狐だった。

いやアレは狐じゃない、この世界の常識じゃ通用しない何か。

「どうしたんだい？僕の話聞いてる？」

「……………立て続けに起きた信じたくない事のせいで、俺の頭はおかしくなったようだ。」

「全く聞いてないみたいだね」

もう、どうだって良い…姉さんがいない世界に生きてても……

「その君のお姉さんを生き返らせれるとしたら？」

「…なんだって？もう一回言ってくれろ？」

最早何も考える事が出来なかった筈の俺は、その一言で当たり前の様に活力を取り戻した。

ファンタジーだろうとメルヘンだろうと…姉さんが生き返ればそれで良い。

「だーから、君が魔法少女になればお姉さんが蘇るんだよ」

「魔法…少女？」

ますますおかしくなってきた、思わず笑ってしまいそうだ。

「ああごめん、君は男だから…そうだね、魔法少年ってトコかな」

「なんだって良い、早く姉さんが生きかえる方法を教えてくれ」

一秒だって待てない、後一回おかしな前振りなんてしたらコイツをぐちゃぐちゃにしても構わない。

「せっかちなだね、君は……願い事を僕に言っつて、そうしたら君は凄い魔法少年になれる」

願い事？そんなの決まってる。

「姉さんを生き返……」

そこまで言っと思ってた、これで良いのか？と。

姉さんを生き返らせたとしても、またあの化け物に立ち向かうだろう、そしてもう一度死ぬ。

そんなの……ユルサナイ。

「凄い魔法少年？」

「ああそうとも、君の力は底知れないよ、男だつてのに」

そうか、だったら……

「運命も変えれる程に？」

「……努力しただいね」

はは、どんな事だつてやってやるさ。

「俺の、願いは……」

ああそうだ、これで良い……こいつで良い。

「こんな醜い世界を変える力が欲しいっ！っ！」

ワルプルギスの夜によって終わる世界  
終了

## 第一回世界（後書き）

どうでしょう、キャラの喋りがおかしいのは気にしないでくれたら  
…なんて。

感想やご指摘があったらどうぞ暇な時に、それでは。



## 第二回世界（前書き）

引き続きどうぞ。

## 第二回世界

あ、れ？

ここはどこだ？なんだこれ。

「あら、やっと起きた？全くもう、智哉<sup>ともや</sup>は相変わらず、ね」  
ああなんだ…ちゃんと成功したんだ。

目の前に姉さんがいた、死んだ筈の姉さんが。

それどころか日付けも随分前に戻っていた。

たぶん時間が巻戻ったのだろう、それで姉さんが生き返った。

それだけの話。

-----

そんなムシの良い話あるわけないじゃないか。

時間を巻き戻してもマミ姉さんは魔法少女だった。

結局一緒だった。

ただ違ったのは死に方だけ。

今度は「まどか」って言う女の子を庇って姉さんは死んだ。

なんだそれ、俺が生き返らせたのに…そんな事あるかよ、許せるかよ。

だけど俺がその子を恨んだところで変わらない、全く変わらないんだ。

ならどうする？死んじやええ良いんじゃない？ああそうか、死んじやええ良いのか。

じゃあ死のう。

俺は躊躇う事なくマンションの屋上から身を投げだした。

馬鹿みたいに簡単だった。

巴マミが魔女に殺される世界 終了

-----



## 第二回世界（後書き）

感想やご指摘があつたらどうぞ暇な時に、それでは。

## 第三回世界（前書き）

引き続きどうぞ。

### 第三回世界

目が覚めた… 覚めたんだ、覚める筈無いのに。

目の前には姉さんがいた。

カレンダーを見るとまた日付けが戻っていた。

さらに、前と違う事があった… 姉さんが魔法少女じゃなかった。

普通の暮らしをしていて、家族も皆生きてて…

…そうじゃないか、良く考えてみる、俺の願いは時間を巻き戻す事だったか？

違う、世界を変える事だろうか？

だったらこんな風に齟齬が出るのもおかしくない。

まだ確定ではないが、この世界を変える力が俺の能力だと仮定したら？

…話は早い、マミ姉さんが生き残れる世界を見つければ良い。

というか、この世界で正解じゃないか？

魔法少女には危険が伴う、ならこの世界で安心して暮らせれば…

というか、世界が変わってるなら… もしかして魔法少女なんて存

在も無いのかもしれない。

まあ、そんな夢は一瞬で砕かれたが。

「驚いたなあ、知らない魔力反応がしたもんだから急いで来てみたら、まさか男だったとはね」

……分かった事追加、まだ確定じゃないが世界にはファンタジーが付き物らしい、俺に言わせりゃ憑き物だ。

「おい、僕の話聞してる？」

「取り敢えずマミ姉さんには近付かせない様にしないとな、姉さんならうつかり魔法少女になりかねない」

「全く聞いてないみたいだね」

こちらら取り込み中だ。

「ついでにだけど、君のお姉さんは魔法少女にはなれないよ」

「は？」

「お姉さん、ちょっと魔力が弱いみたいだから、他の子優先になるだろうって事さ」

え？じゃあ姉さんは…この世界では魔法少女になれない？

…やはりこの世界なら。



「さ、話してくれるかな」

「…ん？何をだ、キュウベえ」

このやたら喋る白い生き物はキュウベえと言つらしい、前の世界で姉さんが言つてた。

今の所1番の情報通だろうな、魔法少女になるのもこいつ経由だし。姉さんとは仲良さそうにしてたが……どうも隠し事してる様だ、少し気にかかる。

「そうそれとか、なんで僕の名前を知ってるとか、どうやって魔法少女になったかとかもね」

魔法少年だ。

しかし、べらべら喋って良い物が…キュウベえは信用出来るんだろうか。

「なんで話さなきゃならないんだ？」

「君にお姉さんの情報をあげただろう？」

なるほど、情報交換って事か。

なら、少しくらいなら良いかもしれない。

慎重にいきたいが、俺にキュウベえを疑うカードは無い。

こちらの情報を明かすのも手だろう。

「見ての通り俺は魔法少年だ、契約以外の方法でチカラを手に入れた」

少し嘘を混ぜながらだけど、な。

「そんな馬鹿な」

「力の内容は秘密、信じる信じないは勝手にしてくれ」

キウウベえが信用出来ると判断したら教えようか。

「そうだ、ソウルジェムを見せてくれるかい？」

「ソウルジェム？」

何だそれは？

「まさか知らない？魔法少年なのにソウルジェムを？」

「……だから何だそれは？」

「ちょっと待ってね……ああ、ある、きみの右ポケットの中だ、気づかなかったの？」

促された様にポケットを確認すると何か入っていた。

「ああ、コレか……知らない内に持ってたんだ、これがソウルジェムか」

「本気で言ってる？だとしたら物凄い無用心だね、それは魔法少女には無くてはならない物だ」

だから魔法少年だ。

「うん、ちょっと濁ってるね」

「うん？濁ったら駄目なのか？」

「駄目というかなんと言うか、そこまで知らないの？本当に僕から契約した様には見えなくなってきたなあ」

契約したんだけど、良い具合に勘違いしてるみたいだ。

「だからそう言っただろう、で？どうなるんだ？」

「…魔法が使えなくなる、魔力が切れるってやつだね」

つてえ事はだ、俺はもう一回……違うな、契約した世界も合わせて二回魔法を使ってる、それで。

「こんだけ濁ってる…」

このままだと、多く見積もって後八回くらいしか魔法を使え無いな。

「ああ、大丈夫だよ、魔女を倒してグリーンフィードを使えばソウルジェムの穢れは取れる」

……そいつはまた、益々やっかいだな。

戦闘能力皆無の俺の魔法は必然的に単発になったという事か。

つまりチャンスは後八回。

「どうかした？」

「いや、特になんでもない、ビックリしただけ」

「そう、君は魔法少女の事、あんまり深く知らないみたいだね、困った事があつたらいつでも呼んでよ、またね」

そう言つと、景色に解けるようにキュウベえは消えて行つた。

姉さんは魔法少女にはなれないらしいから取り敢えずキュウベえと魔女、それから鹿目まどか周辺人物、ここら辺を注意しておけばマミ姉さんに害は無いとおもう。

そうと決まれば。

直ぐさまノートを閉じ、自分の部屋を飛び出した。

隣の姉さんの部屋の前に立つ。

いつも緊張してしまう、姉弟なのに、どうしてだろ。

いや分かつてる、あの姉さんの身のこなしとかだろうな。

とても中3に見えない。

声をかけようかノックをしようか迷って、結局どちらも行つ。

コンコンとドアをノックしながら声をかける。

「姉さん、いるよね？」

「智哉？入って良いわよ」

良かった。

まあ、姉さんが入るのを拒んだ事なんて無いけど。

言われたように中に入ると、姉さんは退屈そうに読んでいた。

「どうしたの？」

「えっと、姉さんの友達に鹿目まどかさんっている？もしくは美樹さやかさん」

「ええ、一つ下の後輩よ、智哉も知り合いなの？」

いきなり心臓の音がデカくなった。

まさかもう知り合いだったとは、もしかして、もう姉さんは巻き込まれてる？

「いや、友達がその人達を変な感じの子とかなんとか言ってる…  
…その子達さ、なんか変なこと言っていたりしない？」

「変なこと？」

…動揺してない？じゃあやっぱり姉さんは魔法少女関係には関わってないのか？

「こつ、えつと……魔法がナント力……」

「魔法？良く分からないわ、2人とも良い子よ」

「そつか……」

やっぱりハズレだな…当たり前だったとしてももう関係無い。

たとえば鹿目まどかが魔法少女だったとしてもだ、というよりその方が俺としては万々歳だろう、魔法少女関係は鹿目まどかに押し付けられる。

「その友達に何吹き込まれたか知らないけれど、人を噂や見かけで判断するなんて失礼よ智哉」

う…姉さんに怒られるのは辛いな。

「…ごめんなさい」

「ふふ、分かれば良いのよ……あ、新しいの買ってきたの、飲む？」

俺の頭を撫ぜながらそう言って、出してきたのは予想通りティーカップだった。

姉さんの淹れてくれる紅茶は格別美味い。

「頂くよ、ありがとう」

こんな毎日が、これから続く筈だ。

守ってやる…守り抜かなきゃ、そうしないと俺は……

――――

一週間ぐらいたったある日、姉さんはいきなり帰らぬ人となった。

理由は交通事故、姉さんにはつねに注意を測っていたのに…少し気を抜いた瞬間だった。

まるで待っていたかのように、俺が気を緩めるのを待っていたかのように。

巴マミが魔法少女にならない世界 終了

### 第三回世界（後書き）

感想やご指摘があつたらどうぞ暇な時に、それでは。



## 第四回世界（前書き）

引き続きどうぞ。

## 第四回世界

もう二度と無いだろう、姉さんが魔法少女にならない世界なんて。

そうだ、たまによく聞く話をしよう。

女の子がいました。

その子はとてもすごいチカラを持っていました。

その力でその子はとても幸せな暮らしをしていました。

しかし、世界はその子の存在を許せなかったのです。

やがて、その子の強過ぎるチカラに恐怖した世界は、その子の存在を消しました、おわり。

よくある話だろう。

俺はもしかしたら姉さんがこんな状態なんじゃないかと、絶望した。

次の世界はめちゃくちゃだった。

鹿目まどか、彼女が魔女になった……らしい。

らしいと言つのは良く分からなかったからだ。

後でキュウベえに聞くと話してくれた。

魔法少女は魔女になる。

なんでも聞けば答えるとか、じゃあ今まで聞かなかった姉さん達が悪いってのか。

ははっ、笑っちゃう。

ワルプルギスの夜を倒した時、その場にいた魔法少女は四人。

姉さん、鹿目まどか、暁美ほむら、美樹さやか。

この四人は見事ワルプルギスの夜を倒した。

しかし瞬間、魔力切れを起こした鹿目まどかが苦しみ始め、ソウルジェムから魔女が現れたと言う。

魔法少女の魔女化、誰しも予想だになかった事態に混乱し、全滅した。

錯乱して味方の魔法少女を撃ちまくる姉さんを見た時、少し最低な事を思った。

そのまま姉さんは魔女に殺された、あっさりと。

最後に見た姉さんは…果てしなくきれいでむなしかった。

鹿目まどかが魔女化する、この出来事は俺の行動を狂わせるには充分な出来事だったろう。

さらにはソウルジェムに自分の魂があるとの事、簡単に言うと今の体は空っぽでソウルジェムが本体って事だろう。

キュウベえ、これからの世界であいつは信用してはならない事がハッキリした。

キュウベえの目的は宇宙の寿命を伸ばすため、姉さん達の希望や絶望のエネルギーを採取する事だった。

人一倍姉さんを大事にしてた俺はさぞかし良い餌になってただろう。

なんでって、姉さんが死ぬ度に奴らは莫大なエネルギーを得られるからだ、俺から。

だから俺も魔法少女になれた、と言う事だろう。

結構情報は手に入った、これからは姉さんの死亡フラグを必死に消していかないとだろうな。

手ぶらで死ぬわけにもいかないからね。

おっと、いつのまにか俺も死んでいた様だ。

鹿目まどかが魔女になる世界 終了

## 第四回世界（後書き）

感想やご指摘があつたらどうぞ暇な時に、それでは。

## 第五回世界（前書き）

引き続きどうぞ。

## 第五回世界

じゃあ次始めよう、そうだと少し分かった事。だいたいの世界で姉さんは死ぬ。

三度目の世界なんかそうだと、あの姉さんが交通事故なんてそうそう起きるもんじゃないしな。

そういうルールがあるとしたら、俺はそのルールを変えるまでだ。

それと鹿目まどか、あいつもヤバそうだと。

鹿目まどかの魔女化、これは回避したい、問答無用で世界が終わる。

と言うわけで鹿目まどかを排除する事に決めた。

勿論姉さんにばれない様にだ。

排除するには早い方が良く、明日さっさと片付けよう。

昔から片付けは得意だったんだ、どんなに散らかしても直ぐに綺麗に出来る、よく褒められたなあ。

その日の夜、俺はよく分からない事を考えていた。

俺は、鹿目まどかを殺そうとしているのだろうか？

何を今更、排除ってそう言う事だろう？

心の中の黒い俺がそう言う。

排除って違う意味もあるんじゃないの？

心の中の白い俺がそう言う。

じゃあどんな意味？と黒い俺。

……。

はい、負け。

次の日、その日は平日。

俺は朝早く家を出て、事前に調べて置いた鹿目まどかの家の前に辿り着いた。

ここまでくれば後は簡単だ、出てきたところをこのナイフで刺す。

そら、もつじき出てくるぞ、アホ面晒しながら死ぬと良い。

別に恨みでも何でもないが死ぬと良い、姉さんのために。

「そこでなにをやってるのかしら？」

ぶわっと…全身の鳥肌が立つのを感じた。



なにか、ヤバイ物でも相手にしてるような、そんな感覚。

「そこで何をしてるの、と聞いているのだけれど」

そんな事を聞いてきた黒髪の少女は丁度同い年くらいの少女だった。

だが、俺の本能が魔法少年の感か、どちらかがコイツはマズイと告げていた。

「まあ良いわ、まどかを殺そうとしてる時点で貴方の運命は決まったから」

声を出す前に俺は撃たれた、いや撃たれていた？

初めて段がんで撃たれたんだが…こんなに速い物だろうか、というかあいつ構えてたか？

まあとにかく、ご丁寧にサイレンサーまで付けてやがった。

それと、以外に冷静な自分の思考にビックリした。

何回も死んでればこうもなるか、いや俺だからか？

俺を鹿目まどかに見せない為かトドメを刺す為か奴が近づいてきた。

最期に見えたのが、そいつの何やら物悲しげな顔つてのが1番癪に触った。

巴智也が暁美ほむらに殺される世界 終了

## 第五回世界（後書き）

感想やご指摘があつたらどうぞ暇な時に、それでは。

## 第六回世界（前書き）

引き続きどうぞ。

## 第六回世界

さあどうしようか、そろそろ本格的に動かなければ。

推定で後三回ほどしか無い、もうチャンスが少ない。

出来れば前みたいに姉さんが安全な世界に行ってくれると良いが、可能性は低いかな。

それに、そんな風に日和つても物語は動かない。

じゃあどうしよう、キュウベえでも殺してみようか。

いや、危険だ、奴は何をするかさっぱり分からない。

実力も分からない相手と戦うとなるとキツイ物がある。

それに俺の命も後三回だぞ、考えろ、考えなきゃ。

.....。

.....。

.....あれ？

次の世界に行くのが遅くないか？

そっぴや今までこんな風に考える時間なんて無かったような。

死んだらその瞬間スパッと、画面が切り替わるように次の世界に行  
ってたような。

何が起きてる？どう言う事だ？

そして、俺は最悪の事実を知った。

詳しく言うとな調べた、なんせ自分の能力だ、頭の中集中させれば今  
の状況くらい分かる。

なんてったって、この状況を作ったのは自分の能力だからだ。

こんな事になってるのに以外に冷静だな、俺。

こんだけループ繰り返してたから、感覚鈍ったんだろな。

いやー…くはは、なーんだそんな事だったのか。

そりゃそうか、こんな風に世界弄くり回してりゃ罰くらい当たるか。

ああちくしょう……結局何も出来なかったな。

残念だ、それに悔しいのは……最期に俺の事を姉さんが覚えてない  
って事だな。

だって……

だってこの世界は…

巴智也が存在しない世界

改変者が存在しない。

つまり死亡する事が確認されない為、トリガーが引かれずにこのまま世界は進行します。

なお、時間操作は関与しない事とします。

## 第六回世界（後書き）

感想やご指摘があつたらどうぞ暇な時に、それでは。



## 第一話（前書き）

それでは引き続きどうぞ。

## 第一話

「全くさあ、本当に彼は最期まで訳が分からなかったよ」

全く表情を変えず、たんと誰かと会話してる様に白い物は言う。

「世界を壊して世界を作りなおす…これがどれだけ大変な事か分かるかい？普通の人だったら発狂ってレベルを超えてるよ」

ふう、と溜息。

「それが可能な器だったから魔法少女になれたのに、もったいないなあ…1人のヒトを守る為に全てを廃棄するヒトなんて、僕でも頭おかしいと思っちゃうね」

すこし間を置いて、続ける。

「それに、その守ろうとしたヒト…バマミだけ？その子の家族はずっと前に死んでる、だからバマミは魔法少女になれた、その時バマミは天涯孤独になった筈なのさ」

段々と日が登つてき、キュウベえの姿を照らし始めた。

「じゃあ、彼は…バマミの弟の巴智也は誰だい？いや、一体彼は何だい？おかしいじゃないか、矛盾だらけだろう？」

白い体には痛々しい傷が走り、身体を横たえた状態で続ける。

「つまりこの物語は、彼の妄想の産物さ……いや違うね、妄想って

のは彼の頭の中の出来事になってしまっ……確かに世界改変は行われたからね」

やがて、キュウベえは全く動かなくなる。

別の場所から声が続く。

「ワルプルギスの夜によって世界が死んだのもバマミが魔法少女にならなかったのも鹿目まどかを殺そうとして暁美ほむらに殺されたのも」

「バマミと智也、2人で過ごした幸せな日々も、本当だった」

「恋愛感情は勿論の事、愛してたんだろうね、狂うほどに、だから世界改変なんて馬鹿げた事が可能だった……僕には理解出来ないけどね」

「そして彼はバマミの弟として頑張ったさ、結果無駄だったけどね……だから、そうだね、この物語は……」

「巴智也の、夢……だったのかな……ああ全く、人間って本当に訳が分からないよ」

自分だった物を喰い、可愛らしいゲップをした後、キュウベえは去った。

## 第一話（後書き）

はい、これでお終いです。

題名関係なくこれで終わりです。

いままで事故なみに誤字脱字してると思いますが、なにぶん夜に書いたので、すみません。

今書いてるものも構成できしだい投稿したいですが…そちらは多分亀更新でしょおね、すいません。

それでは、また。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2987s/>

---

巴マミの救い方

2011年4月18日00時20分発行